

2026 年度事業計画

2025 年度は、社会活動や経済行動、教育活動が以前の状態を取りもどした 1 年と言え、当財団にとっての事業活動も活発化しました。祖業である論文事業を当財団における中心的な活動に位置付けることを、財団職員全員であらためて確認し、論文事業の普及活動に力を入れた 1 年となりました。その効果もあってか、生徒・児童数が減少し、学校・園が減り続ける中においても、論文事業においては、昨年度比でほぼ横ばいの応募状況となりました。今後も論文事業を大切に、当財団として来年度も引き続き注力して参ります。

2026 年度は、論文事業拡大に向けた取り組みとして、教育・保育の現場に足を運び、直接、現場を支える先生や保育者の方々とつながることを更に進めていきます。一方では、従来の取り組みを漫然と継続するのではなく、しっかりと検証活動を行い、新しい取り組みへのチャレンジ、効果がないと思われる活動については躊躇なく見直すことを積極的に検討し、取り組んで参ります。またその際、財団の事業継続性という側面も踏まえながら、組織・人事の体制再構築も並行して併せて取り組んで参ります。

日本の教育・保育界を取り巻く課題は非常に幅広く、年を追うごとに複雑化しています。教師・保育者数の不足やモチベーションの課題、労働環境、学力格差の拡大など、こうした諸々の問題のうち、ソニー教育財団が世に対して貢献できる領域、内容にフォーカスしながら、これまで大切にしてきた「科学する心を育てる」保育と「科学が好きな子どもを育てる」教育の原点に立ち返り、子どもたちの明るい未来を育むための事業を展開して参ります。

【公 1】 科学教育を中心とし、乳幼児と児童生徒の豊かな人間性の確立と創造性の育成を目指す事業

教育実践論文募集をベースとした本事業は、当財団の主幹事業であり、論文主題に沿った教育・保育実践論文（学校・園対象）と未来へつなぐ教育計画（学校教員対象）を募集し、優れたものを選定し、その学校・園、教員個人に対し、助成を行うものです。また、助成するにとどまらず、その実践をベストプラクティスとして、他校・他園に紹介し、ともに研鑽していくことを目的としています。

1. 保育実践論文（ソニー幼児教育支援プログラム）

2025 年度、「科学する心を育てる」をテーマとした「ソニー幼児教育支援プログラム 保育実践論文」には、少子化や公立園の統廃合、私立園の倒産件数過去最多などの向かい風の中ではありますが、全国の幼稚園・保育所・認定こども園から 147 件（前年度▲1 件）のご応募いただきました。

2002 年の論文事業開始から 20 年近く連続してご応募いただいている研究熱心な園もある中で、今年度は、「子どもたちの“科学する心”を通して園を改革しよう」と試みられた「初応募」の園が数を増やしました。最優秀と優秀の受賞園においても、11 園中 9 園が、初めて論文にチャレンジされた園でした。子どもの主体性を重んじ、「科学する心」を通じて保育や園の在り方を問い直していこうという園があるのは、当財団として大変喜ばしく、励みになるものでした。

さらに今年度、23 年の論文の歴史で初めて、0, 1 歳児のみの実践論文が最優秀に輝きました。論文の実践対象は、2002 年開始当初は 3 歳から 5 歳、2019 年には対象を 1 歳からに、昨年の 2024 年には 0 歳からに引き下げ、時代に合わせて審査の観点も見直しを行いました。この結果を通じ、対話や共同作業もまだ少ない 0 歳児にも“科学する心”はあるという保育者の信念のような思いを、保育業界だけでなく広く社会に知っていただければと願っています。

（１）質の高い保育と研究の公開・学びの場の提供

「科学する心」を育てる優れた保育実践を広く公開するため、2025 年度は、最優秀園 2 園（熊本県・岐阜県）、審査委員特別賞 1 園（大分県）の計 3 か所での「実践発表会（公開保育・研究会）」を行いました。いずれの会も、各園の特性を生かした内容で開催することができ、特に岐阜開催では 200 名を超える参加者にお越しいただきました。中でも、5 月 24 日（土）に熊本県で行われた「荒尾第一幼稚園」の実践発表会は、ソニー教育財団としてもはじめて、ショッピングモール（ゆめタウン荒尾シティーモール）のイベントスペースを会場とし、保育者の成果や思いを、地域の方にも届ける試みを行いました。「先生！」と会場から壇上の保育者に手を振る子どもと保護者の姿なども見られ、財団としても今後を考える、大変有意義な会となりました。

2026 年度は最優秀園 2 園の「実践発表会」に加えて、地域の論文執筆者が集まって、研究発表や論文について語り合えるような「Gathering（ギャザリング）」を新たに企画・開催する予定です。

（２）「科学する心」を育てる保育の発信強化・学会協賛

「科学する心」を育てる保育の普及のため、2004 年から毎年作成している『科学する心」を育てる実践事例集』の発刊や、Web や SNS での保育実践の配信に加えて、保育研究者や実践者が集まる「学会」にブースを構えた PR 活動を行いました。ひとつは、「日本保育学会」が 6 年ぶりに対面にて実施（長野県立大学）した会で、約 2000 人の来場者があり、持参した論文募集要項や事例集が足りなくなるほどの盛況ぶりでした。基調講演では、「保育実践論文」審査委員の秋田喜代美先生（元東京大学教育学部学長）から「ソニー教育財団」の活動をご紹介くださる場面もありました。もうひとつは、福岡県の西南女学院大学で行われた「日本乳幼児教育学会」で、450 名の参加がありました。2026 年度も新たな施策を模索・実施し、普及・PR 活動を強化します。

2. 子ども科学教育（ソニー科学教育プログラム）

本プログラムは小・中学校を対象とした「教育実践論文」と、小・中学校の教員個人を対象にした「未来へつなぐ教育計画」の二つの論文部門で構成されています。教育実践論文は「科学が好きな子どもを育てる」を主題に全教科等を対象とし、教育の実践と計画に関する論文を募集、優れた取り組みを進める学校に対して助成を行っています。また、未来へつなぐ教育計画は全教科等を対象に「将来、子どもたちが必要とされる資質・能力の育成」を設定し、その育成計画を募るものです。入選者にはその実践に向けた助成を用意しています。

（１）教育実践論文 応募数増加に向けた施策の展開

■周知活動の継続的な強化

2025 年度は前年度比 3 校増の 94 校から応募があり、学校数は昨年度とほぼ同水準となりました。小中学校の教員をとりまく複数の環境変化要因（教科担任制の導入、働き方改革、中堅教員層の不足など）がある中で、継続的に取り組んでいる学校が最優秀校・優秀校の多くを占めていることが特徴的です。教育実践論文は過去 1 年間の実績とその結果・考察を基に次の 1 年間の計画をまとめるもので、学校や教員にとって「科学が好きな子どもを育てる」ための指針や手立てを考える有用なツールであると考えています。2026 年度も財団事業の周知と理解を深めるイベント型の広報活動を積極的に展開し、応募数の増加につなげたいと考えています。

（２）未来へつなぐ教育計画 さらなる認知度アップによる応募数の増加

2025 年度で 5 度目の募集となった教育実践計画には前年度比 12 名増の 56 名の先生方から応募をいただきました。2024 年度と同様に、内容的にも資質や能力も多岐にわたるものが提案され、ユニークな実践計画が寄せられました。さらにこれまで応募がほとんどなかった地域や特別支援学校の先生が入選されたのが特徴的です。教育実践論文と同期して周知広報活動に努め、この論文部門を大切に育てたいと考えています。

（３）最優秀校のベストプラクティスをより広く共有できる仕組みづくり

■「子ども科学教育研究 全国大会」の企画運営

教育実践論文の最優秀校（小学校 1 校、義務教育学校 1 校）による実践事例を発表いただく全国大会を 2025 年度は福井大学教育学部附属義務教育学校（福井県）と射水市立片口小学校（富山県）の 2 校において開催いたしました。福井大学教育学部附属義務教育学校では幼稚園も含めた 12 年間を通した学びを通した「学びと育ちをつなぐ教育」や義務教育学校の特色を生かした教育活動を、また片口小学校では「子どもが AAR（見通し、実行し、振り返る）サイクルを自ら回しながら問題解決できるようにする」ことが授業者だけでなく児童にも意識された取組を、それぞれ公開しました。いずれも子どもたちが主体的、対話的に取り組む内容で、全国から参加された方の学びの場にもなりました。

2026 年度は開催予定校である「刈谷市立朝日中学校（愛知県）」、「郡山市立明健小学校（福島県）」とすでに検討を始めており、それぞれの学校・地域の個性に合った全国大会を 2026 年秋に開催する予定です。

【公 2】科学教育を通じ、豊かな人間性確立と創造性の育成を目指す児童生徒対象の体験活動事業

この事業は子どもたちの内部にある「科学する心」を引き出し、大きく発揮できる体験を提供することで、「科学する心」の育ちにつなげることを目的としており、「ソニーものづくり教室」「科学の泉－子ども夢教室」の 2 つの事業で構成しています。

1. ソニーものづくり教室

故四方淳一氏（帝京大学医学部 名誉教授）からのご寄付「ものづくり基金」を原資として、「ものづくり教室」を全国で展開して、多くの子どもたちの科学への興味・関心を引き出すための活動を行っています。公益財団法人の財務 3 原則の一つである収支相償の課題は 2024 年度に解決しましたが、引き続き「ものづくり基金」のバランスを考慮しながら、適切な事業ボリュームで計画・実施をします。また、ソニーグループに所属する社員の参画を推進して、新しいコンテンツの開発も手掛けて参ります。

（１）ソニーグループ事業所主催の「ものづくり教室」の開催

主としてソニーグループの事業所（工場）が主催する「ものづくり教室」は、地域貢献活動の一環として開催しています。社員が講師となる対面の教室の開催は堅調で、2025 年度は東北・関東・九州地区などで合計 21 回実施、396 名が参加しました（2024 年度：45 回実施、1026 名参加）。2026 年度もこの活動の支援を継続し、より多くの子どもたちの学びの機会を支援いたします。

（２）財団主催の「ものづくり教室」の開催

子どもたちが科学への興味・関心を深めることを目的として財団が主催する「ものづくり教室」は、2025 年度に

30 回実施、363 名が参加しました（2024 年度：27 回、359 名）。2026 年度は科学館をターゲットとして、首都圏だけでなく、青森県、大阪府、広島県など、これまで実施したことがない施設での開催を計画しています。同時に財団の思いを理解して一緒に開催をサポートして下さる施設との関係性を深め、一緒に学びの場を創出していきたいと考えます。

（３）ソニーグループ子会社等との連携による、財団理念を反映した運営

昨年度に引き続き、財団主催のものづくり教室では、ソニーグループの特例子会社であるソニー・太陽株式会社とソニー希望・光株式会社の社員が講師やサポーターとして参画します。この２つの会社は、ソニー創業者である井深大氏の信念を受け継いで、障がいのある社員の活躍を推進しています。障がいがある社員であっても確実に業務遂行できるように配慮しつつ、子どもたちにとっての学びをどう深めていくか、意見交換をしながら進めて参ります。

（４）「ものづくり教室」の新コンテンツ開発

「ものづくり教室」の質を充実させるためには、新コンテンツの開発も重要です。2024 年度にソニー・太陽にて開発に着手した「マイクロホン」は、2025 年度中にキット化の目途が立ち、2026 年 3 月にものづくり教室のトライアルを実施し、2026 年度に新規運用できるかの判断を行います。また、ソニー希望・光では、デジタル一眼カメラα（アルファ）で画像アノテーション業務に携わる社員達の発案により、2025 年度に「ボックスカメラ」のキット化を行いました。2025 年 11 月にものづくり教室のトライアルを実施した結果、光の特性やカメラの仕組みを学んでもらえると判断し、新規運用を開始しました。

２．科学の泉－子ども夢教室

「科学の泉－子ども夢教室」は、『自然に学ぶ』をテーマに、ノーベル化学賞を受賞された白川英樹博士が塾長として、自然豊かな場所で探求活動と共同生活を行う５泊６日の自然体験教室です。これまで１５回に亘り開催し、2005 年以来 400 名を超える卒塾生を輩出した本教室ですが、多くの塾生を輩出し、本形態の活動としては一定の役割を果たしたと判断し、2025 年度をもって終了しました。

【公３】 科学教育を中心とした教員の質的向上を目指す研究・研修等諸活動を支援する事業

当財団の目指す「『科学する心』をはぐくみ、『科学が好きな子どもを育てる』」には、現場を預かる先生や保育者の方々に、これらの理念をしっかりと理解いただき、効果ある教育・保育をいかに実践していただくかが重要になります。財団の理念に共感し、ともに明日の教育・保育を考え、変革していく教員・保育者を発掘し、その支援を進めます。

１．乳幼児教育

（１）保育者ネットワーク（会員組織）の活動と拡充

コロナ禍の 2020 年に発足した保育者・教員の個人会員組織（乳幼児のための「科学する心」ネットワーク）は会員数の伸びは鈍化傾向にあるものの、2025 年度に 1250 名を超えました。ソニー教育財団と先生、先生

同士をつなぐ重要なパイプとなっており、主たる財団事業である「保育実践論文」の普及にもつながっています。

8月9日（土）には愛媛県の「むぎの穂保育園」にて、ネットワーク会員がリアルで集まるオフ会「保育者の夏 Fesss！（フェス）」を開催し、「科学する心」でつながる保育者・教員が実際に会い、共に園を見学し、学び合う時間を持つことができました。また、ネットワーク会員を対象に、財団評議員である井上貫之氏による、園の子どもたちと一緒にたのしめる「ものづくり」をテーマにした『メールマガジンの連載』や、ワークショップ『一緒に作ってふしぎを遊ぼう』のオンライン開催なども行いました。

2026 年度も“会員限定”の趣向を凝らしたオンライン研修会も企画し、財団イベント参加への交通費助成などの会員特典の充実と、新たな会員確保につながる施策を計画します。

（２）幼保小連携プロジェクト「つながるまなざし研究会」活動の拡大

学習院大学の秋田喜代美先生、武蔵野大学の箕輪潤子先生、東海大学の寶來生志子先生を中心に、現役の 4 人の教員・保育者ととも 2022 年度に発足した「科学する心」の幼保小連携プロジェクト「つながるまなざし研究会」。2025 年度は「つながるまなざしカフェ（保育者と小・中学校の教員がお茶やお菓子をいただきながら、園や学校の実践を見せ合ったり、子どもたちの姿について話し合ったりする場）」を仙台市と横浜市で開催しました。横浜市開催は、横浜市教育委員会と横浜市こども青少年局の後援のもと、150 名規模での初めての大規模開催となりました。

さらに、本活動の強化と地域性や今後の全国的な展開を目的に、研究会メンバーである現役の先生を 4 名から 8 名に増員。12 月には 8 名体制で初めて「論文を読み合う会」を実施し、互いの実践を知ることと、幼小の先生が語り合うことの重要性を改めて感じる機会となりました。

2026 年度は「つながるまなざしカフェ」の複数開催や、「論文を読み合う会」のオンライン公開、本活動の理解を多くの方に深めていただけるよう、「科学する心」の幼保小連携に関する新たな冊子の制作を予定しています。

2. 子ども科学教育

（１）ミライティーチャーズアカデミー

「トップリーダー研修会」を「ミライティーチャーズアカデミー トップリーダーコース」と改め、参加者を広く公募して当財団主催研修として実施しています。その「第 3 期」を 2024 年 6 月～2025 年 8 月までの 14 か月の間にわたり開催しました。全体テーマとして「2050 年に子どもたちが自分らしく生きられるように、あなたたちは何をしますか？」を掲げ、8 月 8 日に公開での成果発表会を開催しました。「自分らしさ」、「自己選択・選択決定して生きる子ども」、「他者との調和」、「保護者との一層の連携」等に関して、6 つのチームが議論した内容を発表し、聴講者との議論も活発に行われました。

これまでに 3 期にわたって実施した「ミライティーチャーズアカデミー トップリーダーコース」のレビューを行っており、2027 年度中の次期研修開始を目指して、2026 年度中に目的や内容を固め、実施計画を立案する予定です。

（２）ソニー科学教育研究会（SSTA）との連携による授業研究の向上

SSTA はソニー教育財団の理念に賛同し、実現のために実践を推進する先生方の任意団体で、全国に 44 支部、1,200 名超の会員を擁しています。自治体の枠を越えて全国の教員がつながり、教育実践論文の主題

である「科学が好きな子どもを育てる」を共通のテーマにした授業研究や研修会の開催など独自の活動をしています。

授業研究の最高峰を目指す「エリア研修会」では全国を地域ごとに6つのエリアに分け、複数の支部が合同で「科学的な思考による学びを深め、次代の理科教育を創造する」ことを研究するもので、集合形式の研修会が各エリアで開催され、エリアの特色にあわせた授業研究を1年サイクルで行っています。2026年度も授業経験の少ない若手教員の育成に重点を置いた若手研も企画/実行される予定で、財団としても継続して積極的に支援していきます。

以 上